

華人経済 経営研究

～彼れを知らず己れを知らざれば戦う毎に必ず殆うし～

中国本土からアジア地域、そして世界にまで活動範囲を拡大するチャイニーズ。彼らのビジネスに対する考え方や習慣は日本人からすると異質にして独特で、理解しづらいものだといわれている。チャイニーズを総合的に「華人」ととらえ、彼らの多様な伝統文化と長い歴史から導き出された経営思想、心理と行動を体系的に分析し、華人圏や中国への進出に伴う総合的なノウハウを学び合う関西日本香港協会のみなさんの研究の成果を紹介する。

深圳「南巡講話」跡

訪問記(1)

深圳は1992年の鄧小平による「南巡講話」で一躍有名になった。それは現代中国の発展の象徴のひとつだからである。去る12月4日に香港から日帰り訪問した。

その動機はちょうど10年前のCMMS(華人経営講座)での濱下京大教授(当時)との質疑応答であった。「鄧小平は改革開放の拠点を華北や華東ではなく、なぜ華南の深圳にしたのですか?」それは92年当時、彼の政権基盤は決して安定しておらず、北京から遠い華南の方が邪魔が入らないと判断したからです。

鄧小平は76年の文化大革命の終了と同時に四人組を追放して政治の実権を握り、79年・82年には深圳を含む4つの経済特区と、香港の「一国二制度」をそれぞれ発表した。84年には改革開放宣言をしたので、うかつにもその後8年間も基盤が脆弱であったとは思ってもいなかった。南巡講話以降の中国経済の驚異的発展を見るにつけ、そのルーツを一度見ておきたいと思った。

置して面積は1・66キロ平方メートルとかなり広い。正面入り口には立派な花壇があつて色とりどりの花が歓迎してくれる。入場料は無料。標高106メートルの山頂まではゆつくり歩いて20分。うっそうとした南国の木々の間に布製の「論語」の代表的標語も見られ、森林の手入れに広東政府の配慮が感じられた。

92年1月19日に深圳を再訪した鄧小平は山頂まで歩いたと言われる。山頂手前には84年揮毫の大きな石碑があり、「深圳の発展と経験は経済特区の設立というわれわれの政策が正しかったことを証明

している」と記されている。山頂は4000平方メートルとかなり広く深圳市が一眺できる。中心には高さ6メートルの鄧小平像があり、深圳市に向かって力強く歩きだしているように作られている。

約1時間かけてゆつくり回る形式で、当時は市内で最高層であったが、現在はさらに高いのが2つ出てくる。同行願った香港の秘書嬢に広東語で頼んでもらった地元料理を堪能しながら窓から市内見物をした。

香港と違ってビルディングがゴールドだった。全階紫であったりかなり派手なビルが林立している。遠方の山肌を削つた広いスペースに何やら建設工事中なので、マネジャーに問い合わせたところ、見えているのは香港領で、巨大なごみ処理施設ということであった。人口700万人の香港に改革開放によって収入の増えた中国人が大陸から年5000万人も観光するのだから、当然ごみ処理施設も必要になるのである。うかつにも現在中国人が香港で買うのは健康に安全な粉ミルクとか本物のブランド品が多いと言われる。(ちなみに日本が昨年久しぶりに外国人観光客が中国人を中心に1300万人を越えたと報道されているが、数だけを取れば香港にはとても及ばない)

具体的には鄧小平の主張は党の機関紙「人民日報」に掲載されなかった。90年と91年には同じく春節を利用して上海に出向き、それぞれ談話を発表した。これも中央宣伝部によって握り潰された。鄧小平は92年には上海からさらに南を目指した。その結果は自身も驚くほどの経済発展であり、地方の党幹部を始めとする民衆の喜びであった。

また、「深圳では84年に1人当たり6000円であった平均年収が92年には20000円になった」という報告を聞いて、満足するとともにさらに励むよう激励した。反面人目のない車の中では北京の保守派を痛烈に批判していたとも言われている。今回は鄧小平vs陳雲、南巡講話の成果について報告する。

南巡講話の足跡と背景

鄧小平は家族・お付きの17人ほどで92年1月17日、列車で北京を出発した。帰ってきたのは2月21日で合計35日間の旅であった。名目は「家族旅行」であった。訪問先は武漢・深圳・珠海・長沙・上海で、この内深圳には11日間滞

在した。87才という高齢にもかかわらず自ら精力的に視察した。

上記2カ所の他にレーザーディスク工場、民族文化村、植物園・動物園などであった。しかもあちこちで共産党の幹部に改革開放の必要性の談話をし、民衆にも歓迎された。なぜか家族旅行を足がかりにしたのか?それには保守長老との長い確執があり、首都北京では政策遂行が思うようにはいかなかったからである。それどころか毛沢東時代に3回も失脚して、その都度復活を果たし、ようやく84年に本格的に始動した改革開放政策が保守派によってことごとく邪魔されたからである。

た。ルーマニアのチャウシエスク大統領は毛沢東時代以来、中国が最も信頼する「友人」であったが、89年12月に処刑された。

かかると内憂外患の中で鄧小平の苦境と苦悩は常人では計りしれないものがあつたと思われるが、強い信念をもって改革開放路線を軌道に乗せたと言える。かかる状況のせいか当時の鄧小平の談話はリアルタイムでは残っていない(後日談話をまとめた記録は残っている)。残っているのは91年上海の「解放日報」に皇甫平なるペンネームで4つの項目に分けた改革開放方針だけである。

逆に言えばそれほど細心の注意を払っていたと言える。後日同行者によれば現地で談話は「発展こそ絶対的真理だ。深圳の発展は実際に基づき仕事をした結果であり、文章や演説で成したものである。空論をやめ、仕事をしろ」とか「20年以内に香港、シンガポール、韓国、台湾の四小龍に追いつけ」など豊かな表現と数多くの類例を駆使して改革開放を鼓舞した。

また、「深圳では84年に1人当たり6000円であった平均年収が92年には20000円になった」という報告を聞いて、満足するとともにさらに励むよう激励した。反面人目のない車の中では北京の保守派を痛烈に批判していたとも言われている。今回は鄧小平vs陳雲、南巡講話の成果について報告する。

(このシリーズは2カ月に3回掲載します)

蓮花山公園―鄧小平像
深圳中心区の北端に位



【藤澤慶彦(ふじさわよしひこ)さん】
日本香港協会理事、サカイオーベックス 特別顧問。1962年スタンフォード大学政治学部卒(専攻:中国共産党史)。1963年慶応義塾大学法学部卒(中国の第1次5カ年計画)同年東レ入社。1967年東レNY駐在。79年マレーシア/香港会社出向。85年テキスタイル貿易部長(英コートールズ社買収・新工場建設担当)。95年取締役(南通とチェコの織物工場建設担当)。97年常務取締役貿易部門長。98年在ヨーロッパ代表。2001年 東レ インターナショナル監査役

この間、89年に第二次天安門事件によって内外の批判を浴びた。同じ年にはベルリンの壁が壊されて同胞のソ連・東欧の政治体制の崩壊にも繋がっ

た。ルーマニアのチャウシエスク大統領は毛沢東時代以来、中国が最も信頼する「友人」であったが、89年12月に処刑された。かかると内憂外患の中で鄧小平の苦境と苦悩は常人では計りしれないものがあつたと思われるが、強い信念をもって改革開放路線を軌道に乗せたと言える。かかる状況のせいか当時の鄧小平の談話はリアルタイムでは残っていない(後日談話をまとめた記録は残っている)。残っているのは91年上海の「解放日報」に皇甫平なるペンネームで4つの項目に分けた改革開放方針だけである。

逆に言えばそれほど細心の注意を払っていたと言える。後日同行者によれば現地で談話は「発展こそ絶対的真理だ。深圳の発展は実際に基づき仕事をした結果であり、文章や演説で成したものである。空論をやめ、仕事をしろ」とか「20年以内に香港、シンガポール、韓国、台湾の四小龍に追いつけ」など豊かな表現と数多くの類例を駆使して改革開放を鼓舞した。

また、「深圳では84年に1人当たり6000円であった平均年収が92年には20000円になった」という報告を聞いて、満足するとともにさらに励むよう激励した。反面人目のない車の中では北京の保守派を痛烈に批判していたとも言われている。今回は鄧小平vs陳雲、南巡講話の成果について報告する。

(このシリーズは2カ月に3回掲載します)